



寄せ切れ買ひに……

■高い！高い！あ、正氣の沙汰か■

■食糧に次いで起る衣服の革命■

——永代美知代——

●混雑中 暫時閉店●

「姉さん、今年の秋の肩掛を御覧なすつて！私
は昨日松坂屋の飾窓で見て驚ろきました
怖ろしい派手なものです」

新様従妹から聞かされた時にはどんな風に怖
ろしい派手なものが唐物屋の飾窓一つ覗きもしな
い私には、とんと見當もつかなくつた。けれども
十月一日は三越、白木、松屋、高島屋、松坂屋
など一流の店は大店に云はすが、東京中で多

少でも名の知れた呉服屋さんは大抵皆な、申合
せたやうに冬衣大賣出し寄せ切れ見切品大割
引と云ふのを初めた日です、同じ買ふなら少し
でも格安のを欲しいのは人情、殊には折柄久
しい間の物價騰貴ですもの、私も御多分にもれ
ず。その日は朝から出掛けて行きました。

先づ第一番に三越を志して、みんやちやつと
室町で電車を下りると、朝の十時前だと云ふの
に、大戸がびつたり閉つて居て「混雑中 暫時閉
店」と白い大きな文字が書いてある。「閉つた」
とは思つたが、そこから白木はほんの一步。
早速其方へ廻つて二階へ上ると、いきなり目
の付く處に飾られたのは百四十五圓の婦人物の
半コートです。

「百四十五圓の半コート！」

●成金らしくない？●

先づ以て貧乏者はどきどきを抜かれてしまふで
せう、一體何故そんなに高いのか、傍へ寄つて
念入りに覗いて見ると、黒無地でビロードのや

うな毛のやうな、一口に云ふと今から十五六年
も前に流行つた絹ブラシテンの肩掛と云つた風
な地合のものでした。

「アラ好いわね、お召のコートは雨の日に着れ
ないけれど、あれだと大丈夫ね」

見るとセルの着物に絡ちりめんの羽織を着流
した三十四五の奥様風のが此處の番頭らしいの
と話してゐる。

「でも餘り成金らしいかない？」

「どう致しまして、當年は地方へドシ／＼と
送り致して居りますやうな譯合で、へい」

「成る程ね、斯うお米が高くなつて、田舎は景氣
がいゝわねえ」

●あ、正氣の沙汰か●



「一寸と見ると帝 劇あ
たりの女 優でさへ舞臺
着でなくては氣がさし
て着ないらしく思はれ
るやうな、黒地に水色
絹で寶物大の薔薇の押
繪だか刺繡だか、平民
共にはその區別すらつ
き兼ねるもの、絹ブラ
シテンにべた一面リボ
ン刺繡を置いたのなど、

それが従妹の所謂「怖ろしい派手な」この秋
の流行の肩掛」なのでした。

お價格はと見ると六十圓、七十圓、最も安い
ので三十圓前後、二十圓下のは見切り品でなく
てはありますまい。

●金剛石入の夏羽織●

でも驚ろく事はない、大阪の成金なにかしの
妻女は一枚三千圓の夏羽織を道頓堀のある呉服
店へあつらへた——とさうした話を聞かして呉
れた人もある。

三千圓の夏羽織には呉服屋も困つてしまつて
ど、裏地に猫の模様をおき、その猫の眼玉に寶
物大の猫眼石とかダイヤモンドとかを入れたさ
うでした。

けだし、如何に物價騰貴で絹糸があまり織元
の工賃が高いと云つても、たかゞ夏羽織一枚で
すものね、寶石でもちりばめない事には、三千
圓と云ふ大金の掛け處がありますまい。

何はしかれ呆れかへつた話です、昔々徳川時代、千代田の城の大奥では『入用おかまひなし』の懸札が掛けられて、客の上にも客を極め、きんらん人の襦袢に、緞子の襦に、ほとほと贅澤の止まることを知らなかつたと云ふ、そしてそれに劣る現代婦人の奢侈、贅澤！御約、御徳政——あの悲惨なさまが大正の今日に續いて来なければいけません……怖やの、恐ろしやの、私はアタフタ四階の見切り場へとあがつて行つた。

●羽が生へて飛ぶ様●

『どうぞ暫らくおひかえを願ひます、混み合つて居ますから、どうぞ暫らく！』
店員共が一生懸命怒鳴つてゐます。入口の處には麻繩が引張られて、無暗に入る事の出来ぬやうにしてある。けれどもともすると入りたがつては店員共が世話をかり焼かせて困つたもの。やつとの思ひで入れて貰つた私は、まんやまや目白押しに押されて、やつと前に進む位なもの、それから如何やら斯様やら人並に寄せ切

れ、見切りものに手が届く段になると、何の事だ、そこには最うほんの四品五品取り残されてゐるばかり、それともさんざん人様の選り残したものの、氣に入らう答が無い。と同じ思ひの誰か、大きな聲で呼んでゐる。『今日はもう見切りものはお出しにならないんですか、だつて何にもありやしませんよ』
すると不意にバラ／＼、バタ／＼澤山な寄せ切れと反物とを誰かが投げ込んだ。が直ぐまた空っぽになつてしまふ。

●見切物専門のお客●

『駄目、駄目、買はなくなつて可い』
あきらめてしまつて出ようとする。此處にも一魂、彼處にも一魂、奥様、娘、御隠居、いろんな風俗の人達が、少しばかりの空場を見つけては、いきなり坐りこんで、身の廻りへうんとこしよと品物を積み上げて、あれこれ心靜かに選り抜いてゐるのですもの、出るにも出られたものではない。
『ごらんない、あんなに澤山、皆な一人で買

つて行く譯でもありませんまいにれえ』
怒めしうに云ふのもあれば、
『どうぞ些少と通して下さいと通り道を塞がれては困つてしまひます』
など怒鳴つて行くお婆さんもありました。それでも聞えない顔をして、すぶとく品物を持つたまゝ、いつまでも坐り込んでゐるのは、けつく大島の着物にちりめんの羽織と云つた、いゝ風俗の人達に多いのも不思議でした。

●木綿の染がすり●

『めりんすの長襦袢に、銘仙の着物と羽織と、これだけこさへても今年はさつと七十圓ですものやりきれないわ』
知りあひの奥さんが来て物價騰貴をこぼして行きます。
『そんな高いもの買はなければいゝぢやありませんか』
『だつてね、そんな譯にも行かないのよ、私なんぞ古物で間に合して置くけれど姑様の平常着がなくて困るの』

『平常着なら御主人のお古を廻しなさいよ』
『それが駄目なのよ、宅のだつて新しいのを造へないうちは、無暗に他へ廻せやしないわ』
『では木綿の染がすりでも買つておあげなさいよ、それなら三四圓で買へるでせう』
『でもね、それちや姑様の御機嫌がさ悪いわ』
『だつて此物價騰貴にやりきれないぢやありませんか』
『そんな譯にも行かないわ』
奥さんはやる瀬なげに笑つたが、やがてひそ／＼と事情を打明けた。

●若い嫁女的心●

つい二三日前の事だといふ。
『姑様、お氣の毒ですけれど、今年はどうか木綿物で堪へて下さい、何しろ編めいせんが十六圓と云ふ高價ですもの』
『え、何だつてかまやしません』
案外手軽に済んだと喜んだのも束の間、二時間ばかり経つた後の世間話に、姑け聞けがしに云ふのでした。

●衣服の革命は？●

『姑様、私だつて木綿物を着られない譯ぢやありませんけれど、私のは十年來着古しためいせんの平常着があるんですもの、わざわざ買へ

ば木綿だつて、やつぱり無駄ですもの、あるもので済ませて置くだけですわ』
『私だつて今こそ何にもないけれど、娘の頃は〇〇の一人娘で、おんば日傘で育つた人ですよ馬鹿にしなさんな、めいせんどころか燃え立つやうなめりんすの友禪ばかり着せられました、それから嫁入つてから三年目に泥棒にさへあはなかつたら、今頃あなたに平常着の心配なんぞして貰やしません、木綿ものなんぞ着ようとも思ひません』
この姑は此年六十一歳です、今から五十歳年のむかしの、此人の子供時代に友禪めりんすの燃え立つやうなのが、そんなに手易く平常着にする程世間一般に實買ひされて居ましたらうかつまりは買け惜しみの見得ばかりから、つい口から出まかせのおていさいでせうけれど、その無智な笑ふより先づ、嫁女としては四苦八苦してまでも一通りやわらかもの、平常着を姑の前に取り揃へねばならぬハメなのでした。
兎に角日本では食糧問題以外衣服の革命が来なければなりません。